
NEVER WORLD

A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NEVER WORLD

【Nコード】

N6961A

【作者名】

A

【あらすじ】

ネバーワールドオンラインという携帯のゲームをもとにした話です。2038年世界滅亡・・・生き残った主人公は婚約者を助けるために旅にでる。愛さないという愛の形も存在するのかな？

第1話 平和は日々

2038年8月29日……。

あの事故が起こるまでは僕たちは幸せだった。

はあはあ……。

息を切らせながら一輝はホテルのロビーへと入っていった。

ロビーの右側にガラスのショウウィンドウの向こう側に綺麗なドレスを着た人形が何体も立っている。

青年がその中に入っていくと担当の若い女性が奥まで案内してくれた。

「もう、一輝遅刻だよ！」

案内された部屋では樹里が待っていた。

「うわっキレイ……。馬子にも衣装？」

一輝の一言に樹里のパンチが左の頬にヒットした。

樹里は純白のドレスを身にまとい、嬉しそうにクルっと一回りして見せた。

「どう？ 私たちの結婚式にはこれがいいと思うの」

「いいと思うよ。とっても似合ってる」

「ホント？」

一輝は樹里に短くキスをした。

一輝と樹里は8月30、樹里の誕生日に結婚式を挙げる約束をしている。

今日はその最終チェックに来ていた。

「……では、次は来週の結婚式本番ということでしょうしい

でしょうか？」

一輝がうなずくと担当の女性はファイルをしまい、当日の予定表を差し出した。

樹里がそれを受け取ると二人はホテルを後にした。

「来週かぁ・・・」

樹里は遠い空を眺めるように言った。

外は夏休みということもあり、学生であふれていた。

樹里は胸にかかるくらいの黒髪を後ろで束ね始めた。

その左手の薬指には半年前に一輝がプレゼントした婚約指輪が輝いている。

その指輪を買いに言ったときに6号と言われ、その細さに驚いたのを覚えている。

「来週から夫婦だね」

「結婚式挙げただけでそんな簡単に夫婦ってなれるものなのかなぁ？」

「心配？」

「まさか」

一輝は笑って見せた。

だってつい一ヶ月前まで2年間も同棲をしていたし、結婚をして姓は一緒になるけどほかは何も変わらない。

「最後の1週間はしっかり親孝行してやれよ」

一輝はいたずらに微笑んだ。

もちろんと、樹里は手を振りながら駆け出した。

「バスに乗り遅れちゃう！じゃあ、またね」

一輝は立ち止まりバスに乗り込む樹里を見つめた。

次に会うのは1週間後の結婚式。

結婚しても親なものにはかわりはないが、樹里は結婚式まで親のそばにいたいと一ヶ月前に言い出した。

一輝もそれを快く了解した。

樹里は幼くして母親を亡くし、父親と二人きりで暮らしてきた。だから最後の一ヶ月を二人ですごしたいという樹里の気持ちを尊重してあげたかった。

1週間も会えないのは正直辛いけど、その後は何十年も一緒にいられるんだし残りの独身生活を楽しもう。

一輝は町へと歩き出した。

一輝の携帯が鳴り、メールを開くと・・・

『*世界政府からのお知らせ*・・・』

題名を見るなり一輝はメールを消去した。

世界平和だかなんだか知らないけど俺には関係ない。

何ヶ月か前に全軍備廃棄、国境廃止とかニュースでやってたけど世界が変わっても俺たちの日常はかわらない。

戦争がなくなるって言ってたけど、もともと戦争なんてどっかの遠い地域であっただけでここはいつでも平和だった。

町は夏の暑さで余計に輝いて見えた。

一輝は人ごみを抜け、デパートへと入っていった。

この時俺はこの世界は後6日で終わるなんてこれっぽっちも考えていなかった。

その日、一輝は電話でその日起こされた。
不機嫌な顔で時計を見つめると朝の9時を少し回ったところだ。
誰だよ、こんな時間に。

「はい」

「寝てた・・・？」

一輝はその声を聞いていつきに目が覚めた。

「樹里？どうした？」

「明日結婚式でしょ？お父さんに何かプレゼントしようと思って。

一緒に選んで欲しいの」

「いいよ」

「じゃあ、10時にこの前のバス停で」

一輝は電話を切ると再び時計をにらんだ。

バス停まで電車で15分。

着替えて、ヒゲそって、シャワー浴びてる時間はないな。

一輝はベッドから降りると、急いで洗面台に向かった。

外は夏には珍しく風がよくふいていた。

おかげで急いで走ってきててもあまり汗をかかずにすんだ。

電車の中はすいていた。

化粧を直す若い女性、ゲーム機片手に出入り口に集まっている少年たち。

一輝は携帯を取り出し、時間を確認すると9時40分。

なんとか間に合うな。

一輝は胸をおろした。

いつもは遅刻してもなんともしないが、さすがに一週間も会っていないと遅刻なんて考えられない。

早く会いたくて電車の中を歩きたいくらいだ。

一輝は降りる駅の階段の近くに止まる出入り口の前に立った。

一輝がふと窓の外を見ると、高い高層ビルの間から真っ黒の雲のようなものが動くのが見えた。

今日は夕立でも来るのかな？

一輝がのんきに考えていた次の瞬間、車両が一瞬中に浮き停車した。一輝は近くにあった手すりにつかまり難をのがれたが他の立っていた乗客はほぼ全員が倒れた。

・・・何なんだ？！

普段なら車内アナウンスが流れるころだが今日はざわつく乗客で聞こえないのか何も聞こえてこない。

まあしばらくすれば動き出さだろうと一輝は携帯を取り出した。

『電車が急に止まったので少し遅れる』

樹里にメールを送信すると、一輝は空いていた座席に座り外を眺めた。

先ほどの黒い雲が猛スピードで広がっていく。

「あれはなんだ・・・」

だんだん雲が近づくにつれて形がはっきりしてきた。

・・・あれは雲じゃない。

・・・鳥？

「おいっ！あれ何かが降ってくるぞ！」

乗客の一人が叫んだ。

べちゃっ

黒い物体から振っているものが風に乗って電車の窓についた。
一見泥のように見えるが泥にしてはあまりに黒い。
そして重力逆らい上へと上がっていくように見えた。

「なんだこいつは？」

先ほど叫んだ乗客が窓に近づいた。
次の瞬間！

黒い泥のようなものに吸い込まれるように蛾が一匹飛んできた。
すると黒い泥は変形し、包みこむように蛾を囲むと体の中へと入っていった。

「うっ！気持ち悪っ」

女性の乗客が言った。

蛾は黒い泥のようなものを吸収し終わると、変な動きをしはじめた。
まるでもがいているような・・・。

蛾の体は羽をばたつかせるたびに大きくなった。

そして人の顔ほど大きさになると、こちらに牙をむいて襲ってきた。
しかし、窓のガラスに当たり跳ね返された。

これをさっきの乗客がさわっていたら・・・。
考えただけで背筋がヒヤツとした。

とりあえずすべての窓は閉まってるし、こういうガラスは頑丈だからしばらくは持ちこたえるだろう。

後は誰か助けがくれば・・・。

あっ、樹里は・・・！！

一輝はあわてて携帯を取り出し履歴から樹里に電話をかけた。
つながってくれ！！

「・・・ただいま電話にできるできません」
「くそっ！」

一輝はその場に座り込んだ。

あの泥みたいなやつに取り込まれたか？

それともあの蛾みたいなやつに・・・。

どっちにしろまだバスに乗っていることを祈るだけだ。

「おいっ、俺たちどうなるんだ？」

乗客の一人がさわぎだした。

「助けがくるだろ！」

「こんな状況でか？」

「そうだよ。助けに来たやつらまであの変なのに取り込まれて蛾みに俺たちを襲ってくるだろ。助けなんてこねえよ」

次々に乗客が騒ぎ出し電車の中は混乱しはじめた。

「世界政府はどうしたんだよ！」

「武器を全部放棄したんだ。何もできやしない」

「ねえ、あれ」

女性の乗客が隣の車両をつなぐドアを指さした。

その声は恐怖に震えていた。

ドアの向こうには二本足で歩く筋肉むき出しの生き物が立っていた。

「もしかして・・・人間？」

確かに体の形は人間そのもの。

まるで人間の肌が変形に耐えられず引きちぎれたような・・・。

「まずいつ！こっちにくるぞ！」

一輝はそう叫ぶとドアの方に駆け寄り、ドアを閉めた。

次の瞬間、筋肉むき出しの生き物がドアのガラスの部分をたたいた。

「うつつああああ」

生物はうめき声を上げながら何度も何度もドアをたたいている。

「いやあああ！」

女性の乗客がその場に倒れこんだ。

「私、あんなふうになりたくない！なるくらいならこの場で死にたい！」

その言葉を聞いて今まで騒いでいた乗客はみんな静まり返った。誰だってあんなふうになつて誰彼かまわず襲うようなことはしたくない。

どっちにしろここでのたれ死ぬか、あいつらみたいに變形して自分を忘れるかしか道はないだろう。

生きる道はどう考えても残されていない。

「俺は外で生きる道を探す」

一人の男性がそう言うのと窓へと近づいた。

「やめて！私たちまで化け物みたいになっちゃう！」
乗客が次々に叫びだした。

「外に行けば生き延びられるのか？」

「ここでじっとしてるよりいいだろう！」

「外はあの化け物に殺されるか自分が化け物になるだけさ」

「じゃあどうすればいいんだ！？」

それはみんなが聞きたいよ。

一輝はため息をついた。

「とりあえず、落ち着こうよ」

一輝が言うのとみんな黙り込んだ。

一輝はドアの向こうに変な生物がいないことを確認してその場につきわり込んだ。

今考えることは樹里のこと。

何で今日なんだ。

明日、結婚式だったのに。

せめて後一日待って欲しかった。

夫婦として死にたかった。

一輝は携帯を取り出すと先週撮っていた樹里のドレス姿の画像を表

示した。

「キヤア！」

女性の悲鳴で顔を上げると窓から十何体もの変形した人間たちがこちらを眺めていた。

次の瞬間車両が大きく揺れた。

「あいつらこの車両を横倒しにするつもりだ！」

「待て！ここって確か・・・」

「陸橋の上・・・」

このまま横倒しにあつたら地上に転落。

変形した人間に殺されることもなく、変形することもなく落下して死ぬだけか。

そのほうがいいかもしれない。

樹里のことを考えながら死ねる。

グラツと大きく揺れ車体が傾き始めた。

乗客はみんなあきらめたようにそれぞれ静かにその時をまっている。

一輝は携帯をもう一度見つめると樹里の画像に優しくキスをした。

・・・・・・愛してる。

次生まれ変わることがあつたら・・・次こそは結ばれよう。

一輝が目を閉じると、傾きがいつそう大きくなり次の瞬間体がふわりと宙に浮かんだ。

さようなら・・・樹里。

第1話 平和は日々（後書き）

この小説を呼んでゲームに興味を持ちましたらこちらから
<http://www.n-w.jp/>

後、感想をいただくと作者はとても喜びますw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6961a/>

NEVER WORLD

2010年11月14日11時18分発行